

重村光輝 提出 学位申請論文

『中山間地域における地域資源を活用した6次産業化による  
地域振興の可能性 ～ 地域の特徴を活かしたものづくり  
による価値創出に向けた取り組み ～』 審査要旨

### 論文内容の要旨

本論文は、著者の問題意識である中山間地域の過疎化・衰退に対して、現地の実態調査を踏まえての展望と可能性について論考したものである。このテーマに対するアプローチとしては、1次産業（農林水産業）という狭い生産枠を超える6次産業化という観点、製造業（ものづくり）の建て直し等で注目されている技術経営（MOT；Management of Technology、以下MOTと略す）の考え方、地域資源の活用としての風土の重視といった視点に特徴があり、著者なりの見解が示されている。

多くの山村が衰退の道を歩んでいるなかで、山村の地域活性化にそれなりの成功をみせている事例に着目した著者は、とくに徳島県の上勝町を集中的にフィールド調査するとともに、隣県の高知県馬路村、岩手県の葛巻町などの調査を行ってきた。本論文はこうした現地調査の積み上げを土台にして集大成したものである。

本論文の章別内容構成の詳細は、次のとおりである。

## I 農山村地域の振興の歴史と上勝町の歴史

### 第1章 研究の背景と目的

#### 1.1 研究の背景

#### 1.2 研究の目的

##### 1.2.1 MOTの視点から6次産業化を考察する内容

#### 1.3 研究の対象地域

#### 1.4 風土の視点による6次産業化の考察について

##### 1.4.1 風土に関する先行研究

#### 1.5 先行研究について

### 第2章 戦後の農林業をめぐる動きと上勝町の振興策の経緯

#### 2.1 戦後の復興期 1945（昭和20）年～

#### 2.2 上勝町の発足 1955（昭和30）年～

#### 2.3 過疎などの振興策への取り組み期

#### 2.4 地域での観光への取り組みと地球環境を意識した時代

#### 2.5 上勝町での廃棄物問題やエネルギー問題への取り組み

#### 2.6 定住者の確保に向けたイベントの展開

#### 2.7 人材育成への取り組み

#### 2.8 戦後からこれまでの上勝町の振興策の特徴

### 第3章 農山村地域における地域振興の取り組み

#### 3.1 6次産業化とは

##### 3.1.1 6次産業化と農商工連携の比較

##### 3.1.2 高知県馬路村での農商工連携の取り組み事例

#### 3.2 3次産業、2次産業から1次産業への参入

#### 3.3 体験型の取り組みによる6次産業化

#### 3.4 農業に求められる総合的な経営の視点

#### 3.5 6次産業化への取り組みから地域振興の課題を考える

## II バイオマスを活用した地域振興の現状

### 第4章 バイオマスの活用と6次産業化

#### 4.1 バイオマスエネルギーの導入促進に向けた取り組み

#### 4.2 気候変動への対応としてのバイオマスの活用

- 4.3 再生可能エネルギーとして注目されるバイオマス
- 4.4 日本国内でのバイオマスのエネルギー化
  - 4.4.1 バイオマスの直接燃焼
  - 4.4.2 バイオマスのメタン化によるエネルギー利用
  - 4.3.3 廃食用油の燃料化への取り組み
  - 4.4.4 京都市における廃食用油の資源化例
  - 4.4.5 福岡県大木町でのバイオマスの資源化への取り組み
- 4.5 これまでのバイオマスに関する取り組みと6次産業化の違い
- 4.6 バイオマスの資源化のこれからの展開

### Ⅲ 地域振興における地域資源の活用とMOTの応用

#### 第5章 地域振興への風土の活用

- 5.1 本稿で取り上げる風土に関する研究
- 5.2 地域の風土と地域振興
- 5.3 風土をどのように活かすのか
- 5.4 風土を活かした持続的なものづくりと資源循環

#### 第6章 地域振興に求められるMOT（技術経営）の発想

- 6.1 地域振興の取り組みへのMOTの応用
- 6.2 経済産業省によるMOTの推進
- 6.3 日本の製造業や農業に共通するものづくりの課題
- 6.4 グリーンMOTと農業版MOT
- 6.5 かつての山村の暮らしに見る特徴
  - 6.5.1 多様な要素で成り立つ地域の暮らし
- 6.6 多様性（Diversity）の発想から地域振興を考える

### Ⅳ 上勝町を中心とした地域振興の事例

#### 第7章 上勝町の概要

- 7.1 上勝町での活性化に向けた取り組み
- 7.2 第三セクターによる振興への取り組み
  - 7.2.1 株式会社かみかついっきゅう
  - 7.2.2 株式会社上勝バイオ
  - 7.2.3 株式会社もくさん

- 7.2.4 株式会社ウインズ
  - 7.2.5 株式会社いろどり
  - 7.3 (株)いろどりによる人材育成の取り組み
  - 7.4 交流事業への取り組み
    - 7.4.1 上勝町エコツアー特区
    - 7.4.2 上勝町アートプロジェクト「里山の彩生」
    - 7.4.3 ワーキングホリデイ制度
  - 7.5 地域の環境への取り組み
    - 7.5.1 廃棄物削減へ向けた取り組み
    - 7.5.2 ゼロ・ウェイストアカデミーの福祉活動などへの取り組み
    - 7.5.3 高丸山千年の森
  - 7.6 町民による地域の課題への取り組み
  - 7.7 廃校利用・定住政策
  - 7.8 町内での直売所
  - 7.9 上勝町での有機農業への取り組み
  - 7.10 上勝町の振興策の特徴
- 第8章 上勝町における木質資源の活用
- 8.1 木質バイオマスボイラ導入までの経緯
  - 8.2 上勝町におけるまほろば事業の概要
    - 8.2.1 上勝町でのまほろば事業への取り組み
  - 8.3 上勝町での木質バイオマス資源化の状況
  - 8.4 木質バイオマスの資源化例：埼玉県秩父市との比較
  - 8.5 木質系バイオマスの資源化の課題
- 第9章 バイオマス資源の総合的な活用による6次産業化の例
- 9.1 葛巻町の新エネルギーについて
  - 9.2 葛巻町のバイオマスエネルギー
  - 9.3 風力発電と太陽光発電の導入
  - 9.4 葛巻町の第三セクター
    - 9.4.1 社団法人葛巻町畜産開発公社
    - 9.4.2 葛巻高原食品加工株式会社

- 9.4.3 株式会社グリーンテージくずまき
- 9.4.4 エコ・ワールドくずまき風力発電株式会社
- 9.4.5 第三セクターの役割
- 9.5 葛巻町の事例に関する考察
- 9.6 バイオマスエネルギーの活用における課題
- V 地域振興の取り組みにみる地域資源の活用と価値創出
- 第10章 彩事業と馬路村農協に見る価値創出と地域資源の活用
  - 10.1 (株)いろどりの事業概要と取り組み
  - 10.2 (株)いろどりの取り組みの特徴
  - 10.3 馬路村農協の事業概要と取り組み
  - 10.4 馬路村農協の取り組みの特徴
- 第11章 (株)いろどりと馬路村農協の成長要因
  - 11.1 既存の資源を活かしたものづくり
  - 11.2 多角的なネットワークの構築と情報システムの活用
  - 11.3 価値観や認識の差を活かしたものづくり
  - 11.4 つまものづくりに見る風土と経験を活かしたものづくり
  - 11.5 両事業の形成過程に見る特徴と設備導入
  - 11.6 (株)いろどりと馬路村農協に見る6次産業化の取り組み
  - 11.7 まとめ PDCAサイクルを活かした事業展開
- 第12章 上勝町での地域資源を活かしたものづくり
  - 12.1 上勝町で複合的なものづくりに取り組む阪東食品の事例
    - 12.1.1 阪東食品の商品づくりに見る特徴
    - 12.1.2 地域の伝統的なものづくりである阿波晩茶
    - 12.1.3 阿波晩茶の栽培に見る特徴
    - 12.1.4 阪東食品の販売への取り組み
  - 12.2 山田産業(有)での阿波晩茶づくりと販売の取り組み
  - 12.3 阪東食品のものづくりから販売に見る特徴
  - 12.4 阪東食品の事例から6次産業化を考える
  - 12.5 阪東食品の取り組みからMOTについて考える
  - 12.6 山村型のものづくりの特徴

- 12.6.1 上勝町の暮らしに関するヒアリング：上勝町出身Nさん
- 12.7 地域の暮らしの特徴を活かしたものづくり
- VI Iターンによる就農と地域の活気
- 第13章 上勝町におけるIターンを促進させる振興策
  - 13.1 上勝町内での交流事業や就農支援に向けた取り組み
    - 13.1.2 地域外へ向けた情報発信の取り組み
  - 13.2 上勝町へのIターンによる就農
    - 13.2.1 IターンしたA氏の取り組み
    - 13.2.2 A氏のIターンまでの経緯
    - 13.2.3 有機農業への取り組み
    - 13.2.4 研修生の受け入れ
    - 13.2.5 Iターンによる就農事例（2）
  - 13.3 (株)いろどりによる就農に向けた支援策
    - 13.3.1 (株)いろどりによる基金訓練の取り組み
    - 13.3.2 小松島有機農業サポートセンターの基金訓練
    - 13.3.3 (株)いろどりと小松島有機農業サポートセンターの基金訓練
    - 13.3.4 新規就農者に求められる取り組み
  - 13.4 上勝町へIターンした住民へのヒアリングと結果
    - 13.4.1 上勝町へIターンする住民の特徴
    - 13.4.2 Iターンした住民に見る価値観や認識の差
    - 13.4.3 Iターンと地域住民にみる有機農業に対する考え方の違い
    - 13.4.4 移住者から見た地域内のネットワーク
    - 13.4.5 Iターンを惹きつける上勝町の要因とは
    - 13.4.6 彩事業が注目されることにより地域に与えた効果
    - 13.4.7 地域への注目が高まることによる地域の人々の変化
  - 13.5 誘致型と誘引型によるIターンの促進
  - 13.6 Iターンに対する地域住民の視点
  - 13.7 よそ者を受け入れる地域の寛容性
    - 13.7.1 彩事業による効果
    - 13.7.2 地域の住民にみられるホスピタリティ

### 13.7.3 担い手として期待される I ターン

## Ⅶ 上勝町に関する分析とまとめ

### 第14章 上勝町の取り組みに関する特徴の分析と考察

#### 14.1 上勝町の現状と取り組みに関するSWOT分析

#### 14.2 上勝町の現状分析

上勝町の強み (Strength)

上勝町の弱み (Weakness)

上勝町の機会 (Opportunity)

上勝町の脅威 (Thread)

#### 14.3 SWOT分析から見た上勝町の振興策

#### 14.4 上勝町の機会 (Opportunity) を活かした危機 (Thread) への取り組み

### 第15章 6次産業化の取り組みの今後の展開

#### 15.1 本稿で取り上げた事例に見る6次産業化の特徴

#### 15.2 6次産業化における地域の情報発信

#### 15.3 地域の資源を活用した体験型の取り組みによる6次産業化

#### 15.4 バイオマスの資源化の取り組み

#### 15.5 地域の魅力とIターンの関連性

#### 15.6 事例の特徴から6次産業化を考える

本論文の研究対象は、中山間地域における地域振興の取り組みである。国内の中山間地域は、人口減少や高齢化の進行とともに、地域の主要な産業である林業や農業も衰退を続けている。そのなかで著者が注目しているのが、冒頭でふれたとおり6次産業化、技術経営 (MOT)、および風土の視点である。

6次産業化とは、今村奈良臣 (農業経済学) が提唱したもので、1次産業×2次産業×3次産業=6次産業化を意味している。農林漁業

者が1次産業の枠をこえて、さまざまな加工や販売展開、観光や交流事業などの分野に拡張していくことで、いわばより高次に付加価値を高める展開として地域振興に取り組む動きである。最近の民主党政権下（2009～2012）で、農林水産省の政策として浮上した経緯がある。

農林業の6次産業化では、地域にある資源をどのような手法で加工し、どのような対象に販売するのかといったマーケティングを含めた経営的な視点で総合的に取り組む必要を指摘する著者は、そこにMOTの視点が重要であるとしている。

日本の製造業などが直面してきた問題として、開発した技術が独りよがりのもものとなりがちで、消費者ニーズにつながらず多大な投資で開発した技術が活かされない状況があった。このような状況は、国内の農林業にも共通するととらえる著者は、MOTの発想を農林業ならびにバイオマス（生物系資源）活用等に应用することが有効であると指摘している。そして、実際の事例調査に基づいて、6次産業化への取り組みの問題と課題、1次産業の資源活用の可能性について事例を通じた考察を試みている。

全体は15章から構成されており、論文の大きな流れは以下のように組み立てられている。第1章から第3章においては、農林業や地域の状況に対する対応状況の概要をまとめている。第4章では、バイオマス（森林など生物系資源）を活用した国内の取り組みの現状について動向分析を行い、第5章から6章にかけては、地域振興において地域の特徴をどのように活かすのかという視点からMOTの発想をもとに



活用の可能性について論じている。第7章からは、地域の事例をもとにした展開となっており、6章までの内容を土台として事例分析をおこなっている。

第7章～第9章では事例中心の諸論を展開するとともに、第10章～12章では、事例の成功要因の分析をおこない、価値創出や地域資源の活用について考察している。13章では、人的資源の重要性に着目して、とくにIターンによる就農事例等を聞き取り調査から動向分析し、地域が人を惹きつける要因や地域の活気の要因について分析している。14章では、上勝町の取り組みにおける強みや弱み、相互関係などを分析するSWOT分析を行い、同地域における今後の課題に向けた整理と考察を行っている。15章のまとめで6次産業化への課題と展望について締めくくっている。

より詳しく各章の内容について、以下、簡潔にまとめておこう。まず、第1章では、研究の背景と目的、地域振興の現状の課題、先行研究など、研究が目指す地域振興の方向性について提示している。第2章では、これまでの地域振興の取り組みについて、国内での政策動向や事例として取り上げた上勝町の振興策について整理している。第3章では、6次産業化について、旧来から提唱されてきた農商工連携との比較を行い、農業への異業種からの参入状況、農業を取り巻く状況の変化と農業の現状について論じている。第4章では、6次産業化において振興策の一環として取り組まれる新エネルギーについて、バイオマスの資源化の現状を分析し、6次産業化におけるバイオマスの資

源化の在り方について分析している。

第5章では、6次産業化に関連する内容として風土の視点から考察を行っている。6次産業化では、地域の資源を活用したものづくりが取り組まれるが、この地域資源の活用では、地域の風土性が重要な意味を持つ。風土については、三澤勝衛（地理学者）の風土産業論を一つの手掛かりに、地域資源の活用の方向性について検討を行っている。第6章では、6次産業化に求められる地域資源の活用とバイオマスのエネルギー化、その中での風土の活用とともに、地域振興の課題に対する総合的な取り組みとしてMOTの発想をもとに地域振興のマネジメントの在り方について問題提起されている。

第7章では、調査地の上勝町の各種取り組みの紹介として、第三セクター、新規就農につながる交流事業や住宅整備、とくに力を入れているエネルギー問題や廃棄物問題への取り組み（2003年にゼロウェイスト宣言）などの動向が示されている。上勝町は、地域振興とともに環境問題への対応など総合的取り組みが行われていることで注目される地域である。第8章では、木質バイオマスのエネルギー化の動向を踏まえて、上勝町における木質バイオマスの資源化について、他の地域の事例を比較、参照しながら、資源活用の在り方について考察している。

第9章では、岩手県葛巻町の事例を6次産業化の視点からとりあげている。葛巻町は、6次産業化の政策が進められる前から乳製品やワイン造りに取り組んでいる地域だが、加えて新エネルギー導入（風力、バイオマス）も進んでいる。家畜ふん尿は、堆肥化のみならず発電に

も活かされており、総合的に地域振興が目指されている好事例である。

第10章では、徳島県上勝町の地域振興において、特に注目されている木の葉を「つまもの」として商品化した彩（いろどり）事業について、6次化の視点から分析を行っている。また比較として、上勝町に類似する立地である高知県の馬路村農協についても取り上げている。二つの事例においては、地域特有の資源に着目してものづくりに取り組むなかで、情報システムの構築や販売・マーケティングへの工夫などが積極的に展開されており、それらの取り組みが総合的効果を生んでいる。とくに高齢者が元気で前向きにもものづくりに取り組める仕組みづくりと、それを支える情報ネットワークの構築を同時に行っており、その取り組みが結果的に地域の活気につながっている様子が考察されている。

第11章では、上勝町の(株)いろどり事業の取り組み、高知県馬路村における馬路村農協の成長の要因について、さらに詳しく分析を行っている。(株)いろどりと馬路村農協では、どちらも地域の資源を活かした取り組みであるが、二つの事例では、地域の資源を工夫することで商品化を行い、新たな価値を創出している点の重要性が考察されている。とくに、彩事業では、生産者の能力向上に向けた講習や視察などをおこなうことで、各生産者が独自にもものづくりをおこなえる環境を作り出している。

第12章では、もうひとつの具体例として、上勝町で長年にわたり取り組まれてきた阿波晩茶づくりの事例を取り上げ、地域の特徴を活かしたものづくりについて考察を行っている。上勝町の阿波晩茶は、地

域の中で取り組まれてきた生業であり、茶摘みも手摘みで行われており、栽培から加工、そして販売までの作業を行う6次産業化の典型事例として考察されている。この章で取り上げている生産者は、情報ツールを活用して地域外への直接販売を増やしており、中山間地域での6次産業化では、情報ツールを活用することが地域外への販売に貢献することを示す事例として興味深い。同章で取り上げている阪東食品では、阿波晩茶づくり以外に、ゆずの加工品の製造なども行っており、加工の際に排出される残渣は堆肥化され、栽培に活用される資源循環の輪が形作られているなど興味深い事例が考察されている。

第13章では、上勝町の振興策を支える人材面での動向分析として、Iターンに関する取り組み状況と実績の分析を行っている。Iターンが増える要因としては、新事業を効果的に広報・発信することによる付随的效果として、上勝町の住民自身に活気が生まれ、能動的な暮らしにつながるとともに、それが町外の住民にとっては魅力となって吸引力になっている点があり、好循環が形成されている様子が考察されている。

第14章では、これまでの上勝町の取り組みに関する考察をもとに、SWOT（Strength, Weakness, Opportunity, Thread）分析が試みられている。上勝町では、地域振興対策にとどまらず、エネルギーや廃棄物などの環境に関連する問題への対策（ゼロ・ウェイスト活動）も推進されてきた。過疎地域の弱みを逆手に取り、地域の資源を活かした振興策として彩事業などが取り組まれ、彩事業により地域全体が注目され、Iターンも増加傾向をみせている。地域の問題に対して、こうし

たIターンの新しい人材を新たな視点で活かすことで、地域の問題に対してさらに改善を進める可能性があり、地域の活性化につながることの期待が示されている。

第15章は、全体の総括として、6次産業化を中心に地域振興を考える意義をあらためて強調している。そこでは、具体例を軸に地域の特徴を活かしたものづくりの展開過程として、土地の技術を上手に組織化するMOT的発想が重要であり、活性化につながっていく環境づくりこそが大切であると結論づけている。こうした取り組みが、地域の人々の活気となり、町外の人達に魅力として映ることで、地域への注目度を高め、総合的に地域振興にプラスに働く好循環が生まれる点が強調されている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文のテーマならびに全体的な構成をみると、現代日本とりわけ中山間地域が抱えている非常に困難な問題に真正面からとりくんだ内容であることがわかる。過疎化の進行や1次産業の衰退にどう歯止めをかけるか、地域の活気を取り戻す地域振興の在り方については、従来から多くの研究者や行政担当者が様々に模索を重ねてきた。その意味では研究論文として、著者の独自性や論文で明らかにした内容と提起の有効性が問われる。

テーマそのものの課題解決に関しては、背景分析としてとくに社会

経済の動向や政策展開の分析など、きわめて広範囲の問題意識と分析軸を必要とするものである。複雑で大きな課題を扱う必要のあるテーマであるが、その点で、本研究論文は、アプローチとしては具体的な事例調査をベースとしての事例研究を土台としたものとなっている。事例分析だけでは、普遍性としての一般化には限界があるのだが、事例研究の積み上げという点で本論文が示している知見は、従来の研究動向の流れにおいてそれなりの示唆をあたえる内容となっていると思われる。

以上、本研究テーマに対するそのような論点を踏まえた上で、本論文に関する評価について、順次示していくことにしたい。

以下の三つの点から評価することができる。

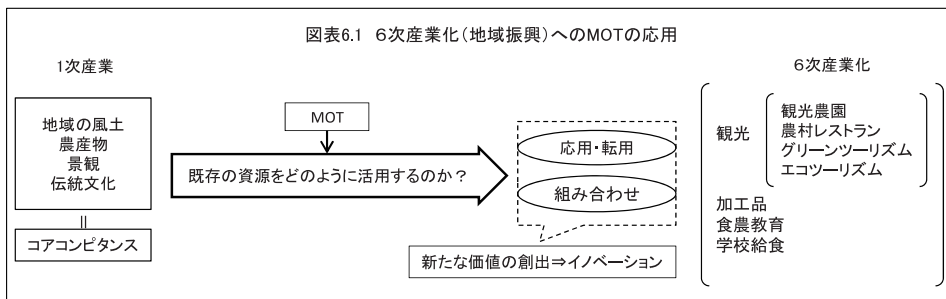
本論文の特質として、第一に評価しておきたい点は、個別事例分析の枠をこえた広い問題意識にもとづいて地域の現場に足をはこび、地域で展開されている様々な動向に目配りして、各種具体的な地域レベルでの取り組みとそのプロセスを究明することで、それなりの分析と課題が提起されている点が評価できる。事例として主に取り上げられている徳島県上勝町や、高知県馬路村、岩手県葛巻町などは、これまでも優良事例として紹介されてきた所であるが、どちらかという個別の事業展開に焦点をあてた紹介や研究が大半であった（本論文の第1章参照）。

著者の視点は、より広く視野を広げて、事業展開の背景にある地域資源の活用のされ方、そこでどのような人々が営みを展開しているか、

地域での人の流入・交流の動きなどに着目して、幅広く動向をおさえた上で特徴分析を行っている点が着眼点として評価できる。

第二に、テーマへのアプローチの仕方として、既存の枠をこえる動きに注目して6次産業化という視点に立ち、従来の1次産業の枠組みをはみ出していく過程でMOTの視点（技術要素の組織化・有効化）を組み入れた考察を行っている点が評価できる。その際、ものづくりにつながる要素として、山村が有する資源や自然環境を風土の特徴としてとらえる視点も興味深い指摘である。

著者の問題意識とアプローチの仕方を端的に示しているのが、以下に示されている図式である（第6章）。



自然資源に密接に関わる農林業（1次産業）の諸要素を、その地域の独自性を発揮するものとしてコアコンピタンスとして見出し、加工など付加価値を高めるものとして組み合わせ発展させていくプロセス（MOT的な発想の展開）を図式化したものである。このプロセスを、生産・加工・各種付加価値の積み上げとして、6次産業化に重ね合わせて考えようとしている点は興味深い。

具体的には、上勝町の葉っぱビジネスや阿波番茶生産、木質バイオ

マスを活用した宿泊施設と自然体験・エコツーリズムなどが、こうした展開プロセスを具現化しているにとらえている。地域に根ざした諸要素に光をあて、都市生活者のニーズを取り込んで販売にもつながるように関連しあう諸要素を組み合わせていく、村人の積極的な関与も加わって総体として相乗効果をもたらされる様子がわかりやすく明示されており、こうした視点や問題提起は評価に値する。

第三に、すでにふれた内容とも一部重なるが、過疎化をくい止めるには産業育成とともに人材の確保ないし流入人口をどう増やしていくかが鍵となる。6次産業化という取り組みには、土地の人々の知識と経験にプラスして外部からの異質の人材や発想が加わって一種のイノベーション的展開を誘発させていくプロセスが重要である。著者はその点にも目配りして、Iターンの転入者にインタビュー調査をおこなうことで、外部から地域の魅力がどのようにとらえられているかを考察している。地域振興には産業育成の側面とともに、それを実行する人材面の確保が欠かせない。いわばハード面の整備とともにソフト面をどう充実させられるかが鍵となることから、Iターンで流入した人々の動向がおさえられている点は評価したい。

以上の評価すべき点に対して、他方、本論文においては幾つかの課題を指摘することができる。

第一に、事例分析と考察は的を射てはいるが、内容的にはより具体的な分析や地域での政策的支援の実態分析など、さらに掘り下げるべき点が残されていると思われる。中山間地の地域振興という大きなテ



ーマを扱うことの困難さもあるのだが、事例の積み上げとしては地域の特殊事情や特別な背景などに関して細かく考慮しきれていない限界性も指摘することができる。全国各地の地域振興事例への目配り、とくに6次産業化を目指している諸事例について著者なりに比較検討して総括することなどが加われば、より説得力をもつ論考になったと思われる。

第二に、上記の限界性のより具体的な内容として、地域事例分析で導き出された考察内容がどれだけ普遍性をもって提起できるかについて、さらなる研究課題が残されていると思われる。どのように地域の資源に価値を見出し、付加価値形成において有効な視点は何であるのか、狭い枠組みをこえたイノベーション的な展開に必要な要素とは何かなど、より明確に具体的に問題提起ができると政策担当者にとっては非常に示唆に富む提起となるだろう。

第三に、中山間地域の地域振興がテーマではあるが、ものづくりという産業振興の視点にとどまらない視点も今後加味していくことが重要ではなかろうか。ポスト産業化社会といわれる今日、人々の人生選択の多様化の流れにおいて農山村生活は旧来的な意味を超えた魅力を生じつつある。自然と共に生きる暮らしの魅力や人生選択を可能にする多様な受け皿とは何か、中山間地域の新しい在り方が問われている。最終的にIターンなどで流入した人々が、地域でどのように暮らしているか、活躍の場はどうなっているか、また年齢層や職業的背景、価値観などについて、さらに詳しく見ていくことで、中山間地域の存在様式への新たな示唆が提起できるのではなかろうか。

本論文において、従来の研究蓄積をこえた重要な問題提起がなされている点を評価した上で、今後の発展的研究として、次のような課題への取り組みを期待したい。すなわち、本事例分析をもとに、多くの地域での実態分析や自治体の取り組みなどにあてはめて、より具体的に課題整理や問題提起をおこなうことができれば、これから各地の政策展開などに、より実践的かつ有意義な提起が期待できるのではなかろうか。

こうした諸課題があるが、先に指摘したような評価すべき点を考慮するならば、本論文は現代的な重要課題に果敢に挑戦し、それなりの新たな知見を示すとともに、これからの地域振興策に対して重要な問題提起を行っていると考えられる。すでに複数の学会において研究成果の発表を行っており、個別論文においても学内および学外においてそれなりの評価を得ている。

著者のバックグラウンドをみると、修士論文では廃棄物処理に関する事業分析を経営学的視点から行っており、そうした視点を地域に適用して本研究がなされていることから、修論の発展的研究の流れに位置付いていると考えられる。また、著者は長崎県出身であり、親が家業として総合建設業を営んでいる関係から、農山地域の活性化問題はきわめて切実なテーマとして受けとめているようである。まさに生涯のテーマ課題として、今後の研究は実践的な意味合いも加味されるものになることが期待される。これまでの研究成果を踏まえて、今後のいっそうの研究発展とともに、地域に貢献する実践的な取り組みにも期待したいところである。

よって、本論文の提出者である重村光輝は、博士（経済学）の学位を授与される資格を有するものと判断した。

平成25年2月21日

主査 國學院大學教授

古 沢 広 祐 ⑩

副査 國學院大學教授

菅 井 益 郎 ⑩

副査 國學院大學教授

久保田 裕 子 ⑩